

向を示す。整形の骨折、変形性関節症、眼科の老眼、白内障、泌尿器科の前立腺肥大症等は老人性変化を反映している。以下、外科；痔疾患。神内；糖尿病。胸外科；血栓性静脈炎。脳外科；頭部外傷。⑥転科を要した重傷例について、転科総数60例、内科24、外科16、整形10、眼科3、脳外科2、以下神内、胸外科、歯科、泌尿器科、婦人科各1。⑦主な転科時診断：内科；癌末期（胃癌、子宮癌、白血病）。外科；胆石症。整形；大腿骨頸部骨折（全例40才以上女性）。眼科；白内障。脳外科及び神内では脳梗塞であるが総数で3例と佐渡病院で脳血管障害が少ない印象を受けた。以下歯科；頬骨骨折。泌尿器科；褐色細胞腫。婦人科；子宮筋腫。など悪性疾患は7例あり、今後定期的な癌検診が必要と思われる。

## 16) 悠久荘におけるデイケア —経過及び今後の問題点— 高須 達郎・他（新潟県立療養所悠久荘）

### 1. 経過

外来機能の充実の一環として、昭和58年8月から精神科デイケアを開始した。スタッフは専任看護師2名ほか、医師、心理、PSW、OT、栄養士が兼務している。参加者の動向は、増加の一途をたどり、予定人員30名のところ1日平均参加者数は37～38名に上っている。

### 2. 治療プログラムの変遷

デイケアの目標を、「やすらぎ・いこいの場」、グループ活動を通じ「対人関係の改善」「自発性の向上」をほかり、「再発防止」に置いてきた。当初の自主活動を主体としたプログラムから、作業を導入した経過およびその結果参加者の変化グループの変化を検討し、今後の在り方として、自主性の向上を目指すグループと就労に結びつく作業グループとに分けることについて述べた。

### 3. デイケア利用者の動態

デイケア利用者の転帰、利用期間、年齢、保険区分などから就業などの可能性と今後デイケアがはたしていくべき長期在院者の「受け皿」としての役割の可能性について検討した。

## 17) 新潟県における精神障害者の小規模作業所の現状と問題点

藤沢 直子・櫛谷 晶子  
高波 厚子・山川かほる  
磯野 靖男・小泉 毅  
(新潟県精神保健センター)

### 1 作業所の設立経過

県内では、家庭での無為に過ごしがちな精神障害者の生活の場の拡大と対人関係の改善を目標に、昭和48年か

ら「保健所デイケア」が行われるようになった。さらに次の段階として、就労に準じた作業訓練を導入したいという市町村・保健所・医療機関のスタッフの意向に家族会組織が賛同し、関係機関や地域の事業所の協力を得て、昭和51年に家族会による県内最初の作業所が開設された。作業所の設立経過そのものが地域ネットワーク作りの活動となっているといえる。

以来、各地で作業所が開設され、昭和56年からは県の補助金制度（63年度16カ所110万円）、昭和62年度からは国の補助金制度（63年度全国96カ所70万円）が開始された。

### 2 作業所の現状と問題点

在宅の精神障害者対象の独立した作業所は19カ所設置されている。他に作業訓練を主体としたグループ活動が5カ所ある。

設置主体は、精神障害者家族会によるもので15カ所と多数を占めている。

作業施設は、市町村所有の施設借用10カ所、作業提供事業所の施設借用3カ所、アパート・民家借用3カ所、その他3カ所である。木造建築が多く、施設の整備は不十分である。通所者総数は、19カ所で約365人であり、準作業所グループ5カ所の49人を加算すると推計414人が作業訓練中である。これは昭和62年度末の県把握の在宅精神障害者数14,936人の2.8%にあたる。

昭和62年度の県の補助金対象作業所14カ所の実績では、通所者数は1カ所平均19.9人（うち女7.1人）、年齢は40歳以上が42.4%で最も多い。次の段階に移行できず通所が長期化するのに伴い、高齢化する傾向がみられる。就職による訓練終了者は26人（8.4%）、再入院による中断は27人（8.7%）であった。作業内容は、弱電部品の組立、紙箱組立、簡単な木工・縫製等の内職仕事が大半で、収入は一人月額3,000円から12,000円と、生活基盤とするには程遠い額である。

元看護婦等の専任指導員を雇い上げるほか、家族会員が交替で詰める形式が多いが、家族が主体的にかかわる力が乏しく、指導員に頼りきっている状況も指摘される。保健所の精神保健相談員・保健婦、市町村保健婦、病院のワーカーが定期的に訪問し指導援助しているが、指導員のあり方は通所者に直接かかわる問題だけに、関係者も含めて十分な配慮が必要である。

### 3 今後の課題

地域における小規模作業所の存在は、再発防止の機能を果たし、障害者や家族にとって大きな支えとなっているが、心理・社会的リハビリテーション機能を強化する